

### はじめに

この『なじま』特別号は、本誌で連載されている「海域学コレクション」(07号、2018年以降継続)の延長線上に位置づけられる。アジア地域研究所はそれまで、文科省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」(2013~15年)を獲得して、研究所が収蔵する1940年代以前に日本で作成された「外邦図」の整理を進めると共に、東南アジアを中心とする海域世界の様相に迫る共同研究を進めた。その成果の一端は、『なじま』04号(2014年)以降の「外邦図コレクション」の記事に示されている。この研究を引き継ぐかたちで、アジア地域研究所を申請機関として科学研究費基盤研究A「渡海者のアイデンティティと領域国家：21世紀海域学の史的展開」(2017-2020年度)を得ることが出来た。

この科研の趣旨については、04号の「海域学コレクション②」(文責：上田)で、次のように述べられている。

16世紀から19世紀なかばにかけて、陸地には国境線が引かれ、国境線で囲まれた土地に住む人々を国民とする領域国家が、西欧からアジアそしてアメリカ・アフリカへと次々と生まれていった。帝国主義のもとで、列強が勝手に引いた境界線が植民地を造り、今日まで国境線として残っているところも、少なくはない。しかしいま、この「領域」という枠組みが、揺らいでいる。スコットランドや

カタルーニャが既存の領域国家からの独立を要求し、イスラミック=ステートはシリア・イランなどのあいだの国境線が無効だと主張した。ここで目を海に転じてみると、そこには境界線のない「海域」が、20世紀なかばまでは、確かに存在していた。領域国家が成立していく過程で、その枠組みに居心地の悪さを感じていた人々は、海に漕ぎ出していった。たとえば「大航海時代」にアジアの海で活動したポルトガル人のなかには、異端諮問が厳しさを増すイベリア半島から別天地を求めて船に乗り込んだ改宗ユダヤ教徒が少なくなかったという。(中略)

渡海者はその重要性にもかかわらず、国家や地域を越えて活動しているために、統一した人格として理解することが難しい。科研プロジェクトでは、渡海者の多面性に目を向けつつ、近世から近代にかけて渡海者と領域国家との関係を解明するために、下記の3つの方向で研究を進めようと考えている。

- (a) 渡海者のライフヒストリーに関する多言語資料の収集と解析(略)
- (b) 渡海者によって生きられた世界の再構成(略)
- (c) 渡海者のアイデンティティを分析する方法の確立(略)

陸の領域国家の枠組みに収まりきれない人々が、それぞれどのような世界を生きていたのかを

明らかとすることを目的に、研究分担者・協力者の参加を得て、アジアの海を渡る人々の諸相に関する共同研究を、2017年より進めてきた。この科研は2020年度で終了する予定であったが、この度のCOVID19パンデミックのために、海外調査や国内研究会の開催を行うことができず、次年度に繰越申請を行った。申請が認められれば、研究成果を2021年度にさらに充実させる。

研究対象とする「アジアの海」とは、ユーラシア・インドそしてアフリカ・オセアニアに囲まれた海域ということになり、インド洋・西太平洋とその下位のアラビア海・ベンガル湾・南シナ海・東シナ海・日本海・オホーツク海などから構成される。これらの海においては、13世紀以前は造船や航海の技術などの制約のために、人の交流を阻む側面が強かった。しかし、14世紀に人類は一つの水嶺を越えたかのように、アジアの海は人が往来する舞台へと変貌を遂げた感がある。特に16世紀以降は、渡海者が歴史の主役として躍り出る場面が、多く現れる。

共同研究の折り返し点にあたる2018年度には、中島楽章氏が研究代表を務める「16-17世紀、東アジア海域の紛争と外交—日本・漢籍・イベリア史料による研究—」（科研基盤研究B、2017-2020年度）との共催という形で、公開シンポジウム「アジアの海を渡る人々：16・17世紀の渡海者」を開催した。その成果に新たな論考を加えて、2021年3月には上田信・中島楽章編『アジアの海を渡る人々：16・17世紀の渡海者』（春風社）を世に問うことができた。

2020年2月1日・2日に、対象とする時代を繰り下げて、18世紀から20世紀前半期の渡海者の実像に迫べく、公開シンポジウム「アジアの海

を渡る人々：18・19世紀」を開催した。開催の趣旨として、次のように掲げている。

近代化の波がアジアに及ぶ18-19世紀、東シナ海・南シナ海およびインド洋では、商人・植民地官僚・文学者・留学生・奴隷など多様な人々が海を渡った。出身をみてもアルメニア人・オランダ人・スコットランド人などのヨーロッパ、インドネシアなどのアジア諸地域、さらにアフリカ東海岸などに広がる。本シンポジウムでは、こうした渡海者の多様性を、総合的に掘り起こす。また総合討論において16世紀から19世紀にわたる近世から近代への移行期に、海域世界がどのように変容したか、検討する。

このシンポジウムの登壇者と報告タイトルは、次のようになった（登壇順）。

- 重松伸司「海のアルメニア商人—17～20世紀アジアの海域交易集団」
- 弘末雅士「東インド文学とインドネシア民族主義」
- 渡邊佳成「コンバウン朝ビルマにおける渡海者—商人・通訳・税関長」
- 中里成章「インドへの闖入者たち（interlopers）」
- 鈴木英明「海を渡りきることの意味—19世紀後半インド洋西海域の救出奴隷を事例に」
- 山口元樹「20世紀前半のインドネシアからのエジプト留学—一人の移動とオランダによる監視」
- 上田信「アヘン戦争を立案したスコットラン

ド人—William Jardine」

『なじま』特別号は、これらの報告をもとに編纂することとなった。なお、中里氏は発表草稿をさらに発展させるために、本号には掲載していない。上田の報告については、以下この序において簡単に言及したい。

### アジアの海における渡海者の変遷

アジアの海における渡海者の様相の変遷は、アジアの海を走る外洋船の主役の交代と密接に関連している。19世紀以前の外洋船は、帆船であった。そして、アジアの海は、モンスーンが支配する海でもある。季節に応じて風向きを変えるその風を読むことができれば、インド洋を東西に、シナ海を南北に往復することが可能となる。

モンスーンに関する知識は、紀元1世紀ごろの状況を反映するギリシア語文献『エリュトラ海案内記』\*1からうかがい知ることが出来る。そこではすでに、絹の産地として中国（チン、秦に由来する）が登場する。さらにオマーンからイエメンへの輸出品のひとつにマダラテと呼ばれる縫い合わされた小船に関する記述があり、これは後のダウ船であったとされている。唐代には西から海を渡ってきた人々が、華南の広州に居留地を作り、集住していたことが知られている。唐末に黄巢の軍勢が878年に広州を襲ったときに、アラブ人やペルシア人など10万人を超える西方の渡海者とその関係者が殺されたとされる。彼らは釘を用いずに部材を縫合した三角帆のダウ船を操り、モンスーンに乗って中国を訪れた渡海者であっ

たと考えられる。

ダウ船が外洋船の主役を務めていた長い時期は、西の渡海者が東を圧倒していた。この状況が変化するのは、宋代の中国でジャンク船と総称される船舶が、外洋の航海に用いられるようになった時期である。この船は水密隔壁によって浸水の速度を遅くする構造を持ち、間切りながら風上への航行を可能にする帆を備えていた。ジャンク船の登場によって、東の渡海者が西へ向かうようになる。

この転換をおそらく決定づけた契機は、フビライが行った日本への海上遠征とジャワへの遠征であったのではないか。元寇と呼ばれる軍事活動では、主に中国の江南地域で建造されたジャンク船が動員された。シナ海域でジャンク船が行き交っていたことは、たとえば朝鮮半島西南沖で見えられた新安沈船などからも、うかがい知ることが出来る。さらに、15世紀前半に行われた鄭和の遠征は、ジャンク船のインド洋進出を象徴する出来事であった。



(写真1) マカオ媽閣廟境内の石に刻まれたジャンク船

ジャンク船（写真1）がアジアの海の主役の座

\*1『エリュトラ海案内記』（全2巻）、薮勇造訳注・解説、平凡社東洋文庫、2016年。



(写真2) 誤解された南蛮船

にあった16世紀、明朝の海禁政策を犯して、中国からは貿易商人がシナ海域で活躍した。その代表的な渡海者の王鏊（王直）は、日本の種子島に鉄砲を伝えたと言われるが、彼が船主としてポルトガル人を伴っていた船もまた、ジャンク船であった。種子島の鉄砲伝来の地には、ヨーロッパ型の



(写真3) マカオ聖パウロ天主堂ファサード遺構レリーフのナウ船

ナウ船（南蛮船）をかたどったモニュメント（写真2）が置かれているが、ポルトガル人ならば南蛮船だという日本人の思い込みに過ぎない。王直らのいわゆる後期倭寇が16世紀なかばに終息したあと、ようやくナウ船がシナ海域での活動を本格化するのである（写真3）。1565年に太平洋を渡る貿易風が発見され、アジアからアジアから太平洋を横断してアメリカ大陸西海岸に到達する航路が開発されたことで、マニラとアカプルコとのあいだを往復することが可能となり、スペインのガレオン船が本格的にアジア海域に姿を現すようになる。

16世紀後半から17世紀にかけて、ポルトガルやメキシコからの渡海者が西洋型の船舶でアジアを訪問し、さらにオランダの渡海者が参入してくるものの、シナ海域の主役は、依然として「地の利」ならぬ「海の利」を得ていたジャンク船であった。ジャンク船と西洋船との利点を併せ持つ朱印船などの船舶も造られた。

1630年代にシナ海域最大の勢力は、鄭芝龍の海上の軍閥であった。アジアの交易で劣勢に立たされたオランダ東インド会社は、1633年に廈門の鄭氏の拠点に急襲し、ジャンク船に西洋式艦船の長所を取り入れた鄭芝龍の新造船を焼き討ちにした。しかし、その直後、金門島の料羅湾で行われた海戦で、鄭氏と官軍との連合艦隊150隻のジャンク船に囲まれ、オランダ艦隊は壊滅

的な敗北を喫している。さらに鄭芝龍の艦隊を引き継いだ鄭森（鄭成功）は、台湾からオランダ勢力を駆逐している。

アジア海域史のターニングポイントの一つは、1683年に台湾海峡に浮かぶ澎湖諸島沖で、攻守双方あわせて400隻を超えるジャンク船が激突した海戦である。攻める側は鄭森のもとを去り清朝に投降した施琅、守る側は台湾に拠った鄭氏政権である。この海戦に敗れた鄭氏政権が清朝に投降すると、清朝は遷界令と呼ばれる海禁政策を解除した。その後、シナ海域には、長い泰平の時代が訪れる。日本と中国とのあいだでは、往来する中国商人を介して清朝政府と江戸幕府とが相手国の情報を聴取することで、外交なき貿易が展開することになる。西洋から来訪する商人に対して、清朝は恩寵として貿易港を限定して、貿易を公認する。日本もオランダ船の来港を、長崎に限った。18世紀なかば以降は、中国での人口急増を背景にして、中国から東南アジアへの移民の波が出現する。

海の泰平は、アジアにおける外洋船の造船技術の停滞をもたらした。他方、ヨーロッパではポルトガル・スペインからオランダ・フランス・イギリスへと、海の覇権が転移するなかで海戦が繰り返され、造船技術が飛躍的に向上する。この東西の差異が、18世紀後半以降、渡海者の様相を激変させることになった。

18世紀後半のアジアの海には、これまでにならぬ船が往来するようになっていた。英語でカントリー・シップとよばれ、インドと広東とのあいだを往復するイギリス船である。イギリス本国とのあいだの交易を担う船舶に対して、地方の交易を行う船舶であるために、この呼び名が生まれた。

中国語で「港脚」と呼ばれたこの船舶は、インドのチーク材を用いてボンベイで建造されたものが多く、ボンベイやカルカッタから運行された。

18世紀末になるとこのカントリー・シップは大型化し、1,200トンに達するものも出現し、東インド会社が保有する社船よりも大きかった。この船の船体は水面から高くせり上がり、接近しても乗り移ることが難しく、強固な構造となっていたために、清朝官軍の艦船やアジアの海賊の持つ大砲の弾丸を跳ね返してしまう。オランダ船に対しては海戦で勝利することができたジャンク船は、このカントリー・シップには太刀打ちできなかったのである。19世紀にはいると南シナ海での交易は、このタイプの船舶によって担われるようになっていった。

カントリー・シップに乗り組み、アジアへと渡った渡海者の一人に、アヘン商人としてその名を知られ、総合商社ジャーディン・マセソン商会の創始者の一人ウィリアム・ジャーディン（William Jardine、1784-1843年）がいる。その一生をたどると、19世紀の渡海者の特色を垣間見ることができる。

## 19世紀以降の渡海者

ジャーディンが生まれた地は、イングランドとの境界線に隣接するダンフリースシャ（Dumfriesshire、現在はダンフリース&ギャロウェイに属する）にあり、アナン川のほとりに沿って広がる肥沃な農地のなかのアップルガース（Applegarth）と呼ばれる小さな散村であった。現在は、放牧地が広がっている。スコットランド教会のアップルカース教会（写真4）を訪ねると、その前





(写真4) アップルカース (Applegarth) の教会

Applegarth, Sibbaldbie and Johnstone Church (Church of Scotland)

庭の墓碑の多くに、ジャーディンの名を見いだすことができる。アップルガースの周囲では、ジャーディン家の農場ブロードホーム (Broadholm) は、この教会から徒歩10分ほどのところにある。

ウィリアム=ジャーディンが生まれたころ、ジャーディン家の農場には、「低地スコットランド・クリアランス」と呼ばれる変動が迫っていた。当時、アナン川流域の農家の多くは「ウダル」(udal)として知られている独特の世襲的な土地占有権に基づいて、領主から耕作権を認められていた。これは、書面による文書を交わすことなく、土地を占有する権利を耕作者に与えられるものである。ジャーディン家が耕作していた土地の所有者は、ダンスフリーズシャの田舎町ロックマーベン (Lochmaben) の男爵の領主ストーモント子爵であり、ジャーディンの父とその隣人は適度な年間小作料を払って占有を続けていた。

もともとスコットランドにおける土地の所有

権は、1685年にスコットランド議会制定法によって正式に設立された限嗣不動産相続制 (entail) に基づいて、不動産の継承は系譜が明確に指定する相続人に限定され、所有権を脅かす可能性のある債務の契約や不動産の売却も禁止され、経営方式を変えることにも制限が掛かっていた。しかし1770年に可決された議会法によって、この状況が変わる。所有者が賃貸収入を引き上げるために相続人の債権者になることにより、不動産の改善への投資が許可されたのである。その結果、農耕地から牧草地へと低地スコット

ランドの景観は、大きく変わった (Devine, 2018, pp.122-123)。土地の経営方式が農耕から牧畜へと生業が変化すると、農家は働き手を多く抱える必要がなくなる。農家の次男・三男は都市へ、海外へと、新たな働き場所を求めて、移動することを迫られることになったのである。これが「低地スコットランド・クリアランス」と呼ばれる大きなうねりを引き起こした。ジャーディン家が長いあいだ耕作していた土地も、領主の意向で牧草地へと切り替わったと考えられる。

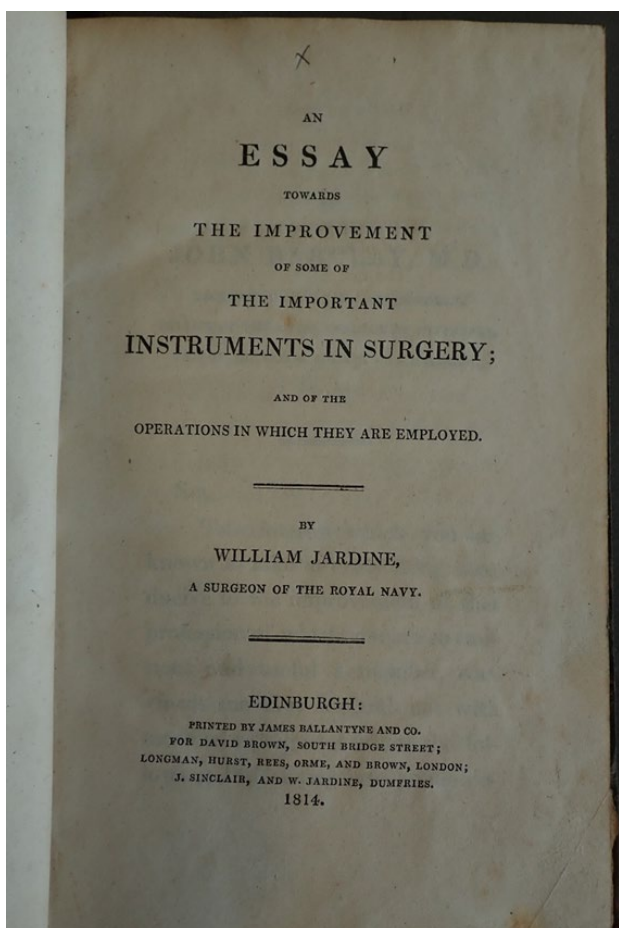
ウィリアム=ジャーディンは、恵まれていた。兄のデビット (David, 1776-1827年)が資金援助し、1800年にエディンバラの医科大学に入学して解剖学と医学を修得し、1802年に外科医の資格を得て、翌年には東インド会社の船医として働くことになったのである。エディンバラの医学は、スコットランド啓蒙主義のもとにあって、中世的な

制約から自由になってイギリス最先端の水準にあったことも、彼が船医としてアジアに赴く一つの契機となったと思われる。彼の前にも後にも、スコットランド人の医学者の多くがアジアに渡り活躍している。

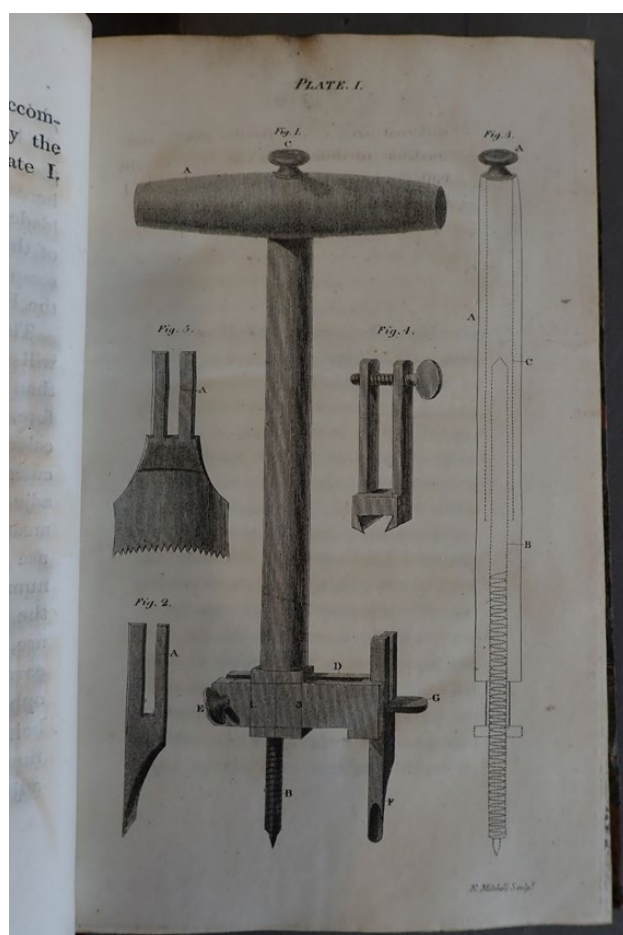
外科医としてのジャーディンの業績は、スコットランド国立図書館に眠っていた。当時の最新の外科器具を解説した *An Essay toward the Improvement of some of the Important Instruments in Surgery; and of the Operations in which they are Employed* (1814) である (写真 5, 6)。肩書きは Surgeon of the Royal Navy となっている。東イ

ンド会社はその従業員に交易船 2 箱分のスペースを与えていた。従業員はみずからの才覚で商品を積み、利益を上げることが認められていたのである。ジャーディンは、この権利を十二分に利用した。従業員のなかには、このスペースを利用しないものもいた。ジャーディンはこうした人から権利を借りて取引量を拡大したのである。船医として 1817 年まで務めているあいだに独立資金を蓄え、カントリー・トレーダーの路に進む。

1832 年に現在も続くジャーディン・マセソン商会を創立する。パートナーを組んだマセソンも



(写真 5) ジャーディンの外科医としての著作



(写真 6) 外科器具の説明に添えられた画像

また、スコットランド出身である。ジャーディンが将来を見通し、果敢な経営を展開する点で優れていたのに対して、マセソンは組織者として会社を安定させる能力があったとされる。ジャーディンなどのカントリー・トレーダーは、海外と本国とのあいだの取引に参入することを切望していた。その機会は、1833年に会社の特許状が更新されるときに訪れた。会社のインドでの商業活動は停止され、翌年には中国と本国とのあいだの貿易独占権と茶葉の貿易独占権が廃止される。ジャーディンはいち早く茶葉の取引に乗り出し、イギリス本国にいち早く茶葉を輸送できるティー・クリッパーと呼ばれる快速船を保有し、他の商社を圧倒し、会社は急成長を遂げる。商社にとっての「道具」にあたる船舶に着目するあたりに、外科医としての業績が最新の外科器具という点と、通底するものがある。

ジャーディン自身の足取りをたどると、拠点とした広州に腰を落ち着け、中国の沿岸地域を広く見聞しているということにはなかった。彼の執務室には腰掛ける椅子もなかったとも伝えられるように、寸暇を惜しんで働いていたジャーディンには、自身で中国現地情報を収集する時間的なゆとりはなかったと思われる。彼に中国の帝国に対する洞察力を養った人物として、プロシア出身のプロテスタント宣教師ギュツラフ (Gutzlaff, Rev. Charle) を挙げることができる。ギュツラフは日本語訳聖書を作成したことで知られている

ギュツラフは1826年にオランダ伝道協会からバタヴィアに派遣され、3年間タイで布教活動を

行いながら、新約聖書をタイ語に翻訳、1831年から中国での伝導に着手していた。1832年に中国から朝鮮の沿岸を探索を目的に航海したロード・アマースト (Lord Amherst) は、東インド会社所有の船で、ギュツラフが乗船していた。ギュツラフは上海の様子を、次のように記している。

ヨーロッパの船舶が、これまでこの地で交易を行ったことはないようである。おそらく揚子江の河口の広大な砂州が、上海に続く河川に船を進めることを躊躇させたからだと思われる。もし砂州の全体を正確に調べれば、沖まで遠く続く浅瀬は、普通に水深調査だけでも危険はほとんどないと判ただろう。ヨーロッパ人がこれまで進出していないアジアの中枢部の港と接続する場所と交易することに、ブリテッシュの産業と貿易事業に新たなチャンネルを開くことを切望する開明的な政治家は関心を持っている。私たちはこの地で、悔しいことに、官僚たちの了見が狭く、道理を知らないことを思い知った。<sup>2</sup>

ギュツラフたち一行は、最初に上海に到着した欧米の渡海者、ということになるだろう。

ちょうどそのころ、ジャーディンは広州以外の土地でのアヘン密売を計画していたのである。1832年10月にジャーディン・マジソン商会に属する交易船シルフ (Sylph) は、広東沖から北上したことを皮切りとして、福建から遼東にいたる海域に進出し盛んにアヘンを密輸した。この商船

---

<sup>2</sup> Lindsay / Gutzlaff, *Report of Proceedings on a Voyage to the Northern Ports of China, in the Ship Lord Amherst* [London], 1833, p.287.



に同乗し、通訳に当たったのがギュツラフであった。上海には12月に再訪し、情報を収集している。その結論として、「帝国最大の商業的中心地（emporium）である」と述べている。

シルフが開拓したネットワークに沿って商会の交易船が、中国沿海地域に乗り出す。翌1833年、ギュツラフはさらに交易船ジョン＝ビガー（John Biggar）の船上から広州のジャーデに宛てて、次のように書き送っている。

すがすがしい強風に乗って、私たちは今回の最初の目的地である南澳（Namoa）（汕頭の洋上に浮かぶ島で、後期倭寇の拠点ともなっていた—引用者）を通過しました。……この地で、私たちはすぐに、前年シルフで航海した馴染みの顧客に迎えられました。最初に販売したのは、キャラコのベールでした。……キャラコはよく売れていますが、カントンの価格を上回っていません。それでも、ブリテッシュの工業製品（原文 manufactures）を〔中国に〕に販路を拓くことはあなたの大きな目的なので、わずかなりともベールを取引できた私たちのささやかな努力を、笑ってください<sup>3</sup>。

この手紙からは、ジャーディンがアヘンだけではなく、産業革命でイギリスの主要産品となった綿織物の市場を中国で開拓しようとしていたこと、ギュツラフが商会の代理人として情報収集を担っていたことを、うかがい知ることができる。

ジャーディンはその功績に応じるためか、ギュツラフが著した中国通史をニューヨークで出版する際に、資金を提供している。

ジャーディン・マセソン商会などのアヘン取引は、清朝皇帝の危機感を高めた。対策のために欽差大臣に任命された林則徐が1839年に広州に到着すると、西暦3月18日にアヘン厳禁に着手した。外国商人から没収した2万箱以上のアヘンを、海上を航行する商船からも望める虎門の海浜で、石灰と混ぜて海水を注ぎ、石灰の発する熱で焼却した。このとき、ジャーディンは表向き商会の経営から退き、イギリス本国への帰路の途上にあつた。イタリアで知ったジャーディンは、日程を繰り上げてロンドンに急行した。

ロンドンに到着したジャーディンは、イギリスのアジア政策に影響力を持つ人々と接触を重ねた。ジャーディンがマセソンに送った1839年12月3日付の手紙のなかで、「ジョン＝アベル＝スミスは私たちが先月の20日にパーマストン卿と訪ねたときに、何が聞き入れられたのか君に伝えてくれるだろう。大臣はアヘンの代金を中国人に支払わせるつもりであり、派遣する軍隊が十分であれば、目的を達成できるだろう」と述べている。なおスミスとはロンドン在住の実業家で、ジャーディンとマセソンとの取引を通じた友人である。

外相と接点を持つことができたジャーディンは、アヘン没収を口実として戦端を開いたあと、イギリスが採るべき戦略、戦勝したときに清朝と結ぶ条約に盛り込むべき条項などを検討し、提案としてまとめる。これがジャーディン・ペーパー

<sup>3</sup> Le Pichon, Alain, *China Trade and Empire: Jardine, Matheson & Co. and the Origins of British Rule in Hong Kong 1827-1843*, Oxford University Press, 2006, p.197.

として知られる企画書であり、1839年12月14日に当時イギリスの外相を務めていたパーマストン（Henry John Temple, 3rd Viscount Palmerston）に届けられたその一節には、次のように記されていたと推測されている。

艦隊を北京の近くまで航行させ、清朝皇帝に〔清朝がイギリスに与えた〕侮辱について謝罪するように直接に迫り、破棄させたアヘンの代金を支払わせ、公平な通商条約を結び、北方の諸港、すなわち厦門・福州・寧波・上海、もし可能であれば潮州を自由に交易できるように開港させるべきです\*4。

長年の中国での活動に裏付けられた正確な情報に基づき、具体的かつ説得力のあるジャーディンの提言を読んだパーマストンは、このときに海軍を中国に送ることを決心したとされる。なお、政治家として慎重なパーマストンは、派兵に関する自分の立場を、翌1840年2月まで公表することを控えていた。同年4月に下院で遠征軍の戦費支出が議論された。反対動議が262票対271票という僅差で否決され、政府が提案した戦費の支出が承認された。こうしてアヘン戦争への道が開かれたのである。

パーマストンはアヘン戦争が終結するまで、そのプランがどのように練られたのかを明らかにしていない。イギリスにとって成功裏に戦争が終わった1842年11月28日に、パーマストンはスミス宛の手紙のなかで、「中国における海軍・陸軍および外交を処理するにあたり、貴殿とジャーディン氏が惜しげもなく与えてくれた助言と情報

に負うところが大きかった」（*China Trade and Empire*の43頁の注107を参照）と述べている。

本国に戻ったあとのジャーディンの足取りを、簡単に紹介しておこう。ロンドンのアッパー・ベルグレーブ・ストリートに邸宅を構え、政治家へのロビー活動を行う一方、スコットランドのパーasherに土地を買い、1841年にはイングランド西南部のデヴォンのアッシュバートン選出の国会議員となった。こうして彼は、ジェントルマンとなったのである。しかし、彼が優雅な生活は楽しむ時間は残されていなかった。1842年末には健康を崩し、翌1843年2月27日に死去する。

## おわりに

16・17世紀と18世紀とのあいだで、渡海者をめぐる状況は大きく変わっている。その一つは、海を渡るときに使用する船舶であろう。西洋における造船技術の飛躍的な進展によって、アジアの外洋船が伝統的なダウ船やジャンク船に替わって、主役は18世紀には西洋式大型帆船、19世紀には蒸気船となる。航海に要する日数が短縮され、安全性も向上した。さらに、海上保険など航海を支える社会的インフラストラクチャーも、整備が進んだ。伝統的帆船も利用され続けてはいたが、地方的な航海に限定されるようになった。

変化のもう一つの側面は、海を越える情報伝達速度と精度の向上である。先述した近刊『アジアの海を渡る人々：一六・一七世紀』で取り上げられている渡海者には、寧波事件と呼ばれる1523年の騒乱の発端となった宋素卿、五島・平戸に拠点を置いて明朝の海禁政策に挑戦した王鏊（王直）、ポルトガルの新キリスト教徒商人ドゥアル

\*4 Le Pichon, Alain, *Ibid.*, p.43.

テ=ゴメス=ソリス、文禄の役（壬辰倭乱）休戦の際に来日した沈惟敬や朝鮮使節、メキシコからアジアに渡り豊臣政権下で命を落とし、長崎二十六聖人の一人となったフィリッポ=デ=ヘスス、日本で国姓爺として知られる鄭森（鄭成功）などがいる。こうした渡海者の多くは、悲劇的な末路をたどっているが、その原因は、正しい情報伝達がなされないために生じたところに求めることができる。

海を渡る情報の不正確さの一例としては、明初に朱元璋が最初に日本に送った使節が大宰府で懐良親王のもとを訪ねているが、明朝側の記録には一貫して「良懐」と記され続けていることが挙げられる。正しい日本情報を伝えようと奮闘した鄭舜功が著した『日本一鑑』は、中国で評価されることはなく、埋もれてしまった。また、こうした不正確さが常態だったことを前提としなければ、沈惟敬と小西行長が共謀した豊臣秀吉の日本国王冊封という偽装工作を、理解することはできないだろう。

18世紀に入ると、状況が一変する。日本の江戸武家政権は長崎に来航した外国船の乗組員から、海外情報を聴取し、『唐船風説書』などにまとめ、政権中枢に届けられ『華夷変態』として編集され

ている。オランダ商館長カピタンが口述した情報は、長崎通詞が『オランダ風説書』として記録した。清朝も外国商人の保証人にあたる特許商人などから、聴取している。

この『なじまゝ』別冊に掲載されている諸論考も、情報の視点から読むことができる。渡邊論文からはビルマに関する情報が、オランダ・フランス・イギリスのそれぞれが収集して貿易に活用していた様子を、うかがい知ることができる。重松論文に取り上げられているアルメニア商人の場合は、アジア各地に分散してはいるものの、一族のあいだで情報が行き来していたと考えられる。弘末論文では東インド文学という言説が、国民意識の形成を促進したと述べられている。山口論文はカイロへ留学し、その後、インドネシアの形成に関わった人物を取り上げ、留学の実像に迫ろうとする。19世紀以降、留学という形で、海を越えて情報や言説が行き交う。これは16・17世紀には見られない事象であろう。また、本稿で紹介したジャーディンもまた、情報を商社の活動のため収集し、さらに本国の国策にも反映させている。こうした重層的・多様な情報の伝達が、渡海者を通じて展開し、歴史を動かしていくのである。